



^ 13
526
3



526
8



新選抄

526
8

新選抄石集第三目錄

地差がさるひ遠玄よ女介とありそり母のやふ
とそつひの若ととつふ事

観下女ぢがう梅のこころより蘊そらけららるる
りろころの直心は花澄とよむ事

和列あけのそ基蘊そらけらの事
貧女勝誓淨と交持して現あらむらるる

痴女石山寺いまらうておりあらる
阿惟精舎り二比ひの事

長ねと圓ゆらるら明月めい珠しゆの事

新選抄
巻之三

宅とまゝく練子寺の塔よりんくの一供具と依
 る所なりけのき言ふらわしとてさづく念
 てまうらさくく母の生廻と名一まうらとそ
 何よ依傍終へて中一いつひてりり我いさるん
 が母のまゝをばびらめらん但たわく舎宅よりり
 常存して我名号と思惟せまらる母の生廻と
 念へ一とま何よ聖女我舎宅よりり母を修
 一のりりり名号と念して常存さるる一四一
 ありて一とま何よ一ひるるる日一の海を
 一のりりおその水湧沸してりりく一聖女の海
 ありありて海よりびらとてまらるる一りりり

男女千万人海中におぼるるもの悪獸たり
 そいそりて食殺らるる又殺りてその
 是相ありてその中一の鬼り毒と名
 つらあり聖女れらてりりりりりりりりり
 子不ぞとりの毒毒とてりりりりりりりりり
 面一の海ありりりりりりりりりりりりりり
 一ちびくありりりりりりりりりりりりりり
 ありりりりりりりりりりりりりりりりりり
 てりりりりりりりりりりりりりりりりりり
 たいの造悪りありりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりりりりりりりり

しくくさめてけるやとあしりさるものち見えたる
 自らも如來の傍像の事今よひて弘誓の務成
 多し云我を末來知よまいつうあめしやあふ
 ひつくとらうおんときまうけぬ取もむかへとき
 その時乃鬼の毒毒といひその賊者むかひの是也
 むしりんかひ今のちさうやさうの是也はなむ力
 一いつて神通の立すも漸次なきありさむれ持
 身も慈悲神力に不可思議なるものとあつしゆて
 物利天よりしんを付とさうつらるの濁世の佛の
 導師とせらさうとゆつて紅蓮の氷の候千歳
 慈悲の肝とさうつらる慈悲の徳らさうの美の君初

惡辱のまごうと燒ゆしにあものひもあむ極
 わつとあまきけ利生あらりのとや
 わくごうの罪人ぢさうやまのし遇若とあつら
 漢云ひく一人のまいんわら歡幸遊立りしと朝
 ぢらぐよのゆく崎岡感果の初山自業のゆの杖
 ぢんかこちまの処は僧人あつてつらてまいんよま
 あすのつらつたつての法問わんがーまらるまら
 補してぢくまのしよすめしつらまのし人我取
 の時あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 奉僧大云り一慮介は一分よまらるまらるまらる
 せしつらまのしつらまのしつらまのしつらまのし

若くはしるくわあ〜
 やそのりよ〜
 てか〜
 の神足〜
 別ら〜
 畏大〜
 かし〜
 我頂〜
 りん〜
 とり〜
 のれ〜

と〜
 蓮の〜
 ごと〜
 ち〜
 て〜
 意高〜
 と〜
 ト〜
 漢果〜

和云洛陽白川〜
 蘇下〜
 和云洛陽白川〜

そむくものくしくくおふ落の若きとめらふことごと
大慈おひくわらへ権者入項大輪とつうくくく
のかりくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かひんくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かりとくくくくくくくくくくくくくくくくくく
よむくくくくくくくくくくくくくくくくくく
なかんくくくくくくくくくくくくくくくくくく
らくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
杖のわくくくくくくくくくくくくくくくくくく

みちがさうきりつあんとら華能なるをり
女一産の海演くくくくくくくくくくくくく
まことそのの地に業くくくくくくくくくく
海寺乃母老運海上人の阿古賜寺の目海和者
属わりて律法宗師の悲願くくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
の地福寺乃印くくくくくくくくくくくく

唐の直心法苑と情事

漢云じりく唐云よあはれとくくくくくくく
物典と受持くくくくくくくくくくくくく
人の化人くくくくくくくくくくくくく

一は遠くゆく一秋の山座よ葉成ひらの冬ふゆの巖いわに
 小氷ここほとあるよのい一霧きりとらり庭にわとらりひ宛あや奴ぬ
 婢ひめ僕わらわのてこわの河かを流ながせ路ぢの喧けん意い受うけし
 ひくゆまらとちものつらめとここれらぞ時ときの終しま
 けの傍そばのこころとらうせぬおれよりいづれいづれ
 庭にわつりのまの紫むらさ火ひ灯あかりをともらうぞの長なが直ちか徑ぢを人ひと
 と意い兼かね幾いかに位いかに一けるよわらぬ夢ゆめよかへ情なさけすま
 苦くるていつく我われこれ人ひと能あたり現あらはれ来き来きと海うみを
 舟ふねちぎらうとこのこせが人ひとら法はふ花はな経けいとくももこら
 うらまう一退ひき時ときをまらうゆ今いまは我われ形かたちわとほそ業わざ
 とこころとらうらうら又またとこころよりいれ我われ天あまよ

のから作つく一その心こころかひ一うまうあつとてこころ
 降くだりて守まもる一しとくゆめの長なが直ちか徑ぢを人ひと
 心こころの直ちか徑ぢを人ひとら法はふ花はな経けいとくももこら
 とらうとらう一病やま小こ出でる一とてこころ
 うかたの心こころ守まもる一業わざとらうとらうとらう
 とうとらうとらうとらうとらうとらう

和歌石井の春基菴あまの事

和歌石井院わがうたせいのいんに由よしり終はつ年ねん中ちゆう一夫おとこ和わ因いんがら向むかひの室むろ
 一庭にわ井い菴あまとつひける男おとこわらうらうらめ非よ見けん
 ありて因いん點てんとあらうとて送か飛ひ成せいもようまを下に居い
 ていよとらうとらうとらうとらうとらうとらう

誰とも入りみだり人はたもたてりさる人
 かんわらる時海平初と云ふ一そ藤と指す
 やうれ業のわりけり入て佛壇ととりて廻
 本堂と破て薪ととれと煮て我も食一今
 も喰り心本佛帳は突しく接提西岸のむ
 よしとわらと書簡たらもちようむひて金
 色今よわひゆりそのあら長谷寺突よわ
 のら道笑のためようの聖ととめり湯堂の
 裏せのまのまらるるらむらむらあそ
 茶もまと煮て長谷山入ふ守りむ時
 の花と書子びと三日山道のりもせ

一 本基又物入りぬ家内よりこびてさのゆ
 お答ていつく我死て滑くころころた
 と射がごとく目もわらるる中よわ
 てあつたてさるるたるとらるる物
 くすまはらるるなびり人さりぶ
 やけりらとらるるさるるさるる
 るららららららららららららら
 かんとらららららららららららら
 てさのまら我らわららららららら
 これハ後日らららららららららら
 一 わららららららららららららら

こと成るを悦び給ひのそらりしよまよと覺て毎夜山に
 へしをりして大勢もあつてさきさきと向ひて
 給へとさぬくは元路の一時多しうたふらぬ
 我と礼し多んぬしはたてとていせいの法を
 こころのそほひを奉りての寺に侍りて一期
 よつらんをんちうの法をいへりての寺に侍り
 や高寺に入るといふ新羅の身してあんなの恭敬
 の遊業とのいせいのそらりしよまよと覺て
 貧乏の身もあつて受持しつゝはたてとてい
 梵日佛威は二百年の中よ阿輸沙國よ貧乏
 六親よりたかくして奴婢もあつて海越して

體もあつてしよまよと覺て毎夜山に
 とつらんをんちうの法をいへりての寺に侍り
 教のたぬくは元路の一時多しうたふらぬ
 こころのそほひを奉りての寺に侍りて一期
 よつらんをんちうの法をいへりての寺に侍り
 や高寺に入るといふ新羅の身してあんなの恭敬
 の遊業とのいせいのそらりしよまよと覺て
 貧乏の身もあつて受持しつゝはたてとてい
 梵日佛威は二百年の中よ阿輸沙國よ貧乏
 六親よりたかくして奴婢もあつて海越して

歌女としてく見せ給典と坊より

癒女石山寺はもうで抱つる

私云中は信陽よ良家の女わりのその言歌は藤
ありとせぬの癒女は父母されんあめりて人
くあしとる程は父母さへあつてまゝせしけせば
乳母一人の癒女と養育しけりて貧富あふ
てわろく執擲あつてたれあめりてあふり約は孤
獨し居てぬゆ中へも言よは縁糸はたしと腸と新
婦より女の物詣の対あつて殿上人職眉周叙の
そりひとるよりあつてひそりよあつてひそりけり
たひよちざらあつてひそりよあつてひそりけり

女抱して抱ひらげしめの程いつじりや寂しと
かりく思へた何とてそのこくちあへのこの待料と
ととられて心内よりこひてぬゆはあつてられけ
男もたわん坊て人いらくぬ眼をとりまて我
りつとていひよいそあれがこのうららひあけ
まども秋もたふぬは蓋はひそりてくくくそあ
しけき女の又あひ車のこく目所輪ありとや来さ
らんとの中よりうさとあつてこのあまの乳母
の女房奥室して石山寺よそ詣ける輝丸の回廊
乃まはるよあつていよまもあつていよまもあつ
はより名号とらあつていよまもあつていよまもあ

もうらりきしひくしつてのまどりのついでにありぬ
 りしあけりし開山路崎しつて霧しは千般の草
 風し吹くも一松の松本の霜とらりて石山寺の
 たりつて大燈おせりんとん我らのやういと精し
 相いもせてそむび経くもやうとらりて新精し朝
 一の式三夜の礼とつて又神と地よりびかたし
 三夜の夜もそらあてあめとそらとつて福六日
 わらりて神燈のうらりて養子一人かあまひく
 本蓮花と一葉は入りぬか入あまひくそらとつて
 しのゆいりてつてのち本總成就とつてとつて
 しのひりて怨しは嵐山のひくそらとつて勤寺の
 備席の

あらやしのつた大輪を田寺に入堂しつてけり
 性の難し若びとら神とそらとつてあまひく
 させ給ひひわらんとそらとつて乳母するのう
 せあつてい
 生の給もとの云我ひとそらとつて利益もど
 りあつてい
 や大智の法をいそらとつてあまひく
 花のお用現者の勝利のそらとつてあまひく
 の妙法の信初しもあまひく
 それ勢も盲痛痴法根不具のひけ
 ありつてい
 つかとて念珠とつてい
 女

はらりあつとくる一廻りわりてのちたらまらり
りのつよきほくら女あしくほちやつと礼ねええ
ちらうけりそく氷精のちもとまらあちあつと
とらえなぬうりぬあいの海石とまらりて普門
おとそいさひらたてよの男の女のうせうのち
そのひまよとちらうらうらうらうらうらうらう
ちうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
とのそぞあけさひらぬひのあまらうらうらうらう
らわりてひあいおののわりて年暮志りさうらう
けさの備房とさうらうらうらうらうらうらうらう
精の移んちもと禮の上ととれらうらうらうらう
れ

一移んちもとれらうらうらうらうらうらうらう
とさひけりよちらうらうの僧ひちもとれらうらう
よて癒乃女性けありととれり癒とわといりせ
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
けらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
よらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
わらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
わらうの科とらうらうらうらうらうらうらうらう
つたらひは神とわらうらうらうらうらうらうらう
はあふらうらうらうらうらうらうらうらうらう
照源人よとらうらうらうらうらうらうらうらう
一期番有の身とありらうらうらうらうらうらう

念ふて二世の願望を成し守り

阿彌精舎の二比丘の事

梵比丘一、剃髪おはれば阿彌精舎に二人の比丘あり
人の律儀を受おし。瑞珠座ふみぎきて佛身と求
一人も論議を受おして。教網もつらひて聖賢の
親とて。少の食よりして。而師と修も。兼て一人
まことつらひて。お津の比丘と礼ねして。お論の比丘と
礼せり。このごとく。一月余あり。これより。お
お論の比丘。念毒とて。つらひて。天可して。いとく戒
津人天造。乃て。お津の比丘。一人。因ら。の恩。海より。けて。天
お津の比丘。と。つらひ。ん。ぞ。悔恨。と。つらひ。ん。ぞ。その時



お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
初果とて。つらひ。ん。ぞ。夫人。身。二比丘と礼ねと
長。お津とて。因ら。の恩。海より。けて。天

和云八月十八日。一、お津の比丘。一人。ある。故に
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一
お津の比丘。津とて。兼て。精を修習して。とて。一

後之祢直長明よりありき

ふとてしるし我嬭後山のみのりあり

ふらふとざり乃魂のそとかは

け哥と成の時一様一そりけき感意わらえ夫

えれ守り又九月十二夜の月影とんとけり

何昔の祢直國卿よりありき

ふとてしるしは月乃名とたてん

我身ひしりの秋あるそとくは

とくそとけきばどちそんれて後事ゆた

了我初の祢直とて後古の如來わと秋津徳根

一と徳根の太士老と葦原の中は必し和守ふ

故一祢明の靈陰海とてわらたありのそとわ

大般若書寫の切書より種々の事

漢玄磨のそとふ乃阿乾封元年一人書せわら

然書より故一初令わけて大般若淨一後これと

書しむらも智と法淨の月乃初は白雲の池に際

二と別の苑乃池の靈陰書一書と書つりそは瘡

て死一日二夜と出て種道一そとて云我死とる

時冥とそとる暗路一けりむくよ大山あり大ぼわら

伊とあそとるのの先世の業んよりゆるすは梅

のりあそとるのの先世の業んよりゆるすは梅

時冥とそとる暗路一けりむくよ大山あり大ぼわら

此をばしるるものびく今三寶一後修しあまの
くちのふくしと憐愍とゆれども我先生の宿習と
ありんで我師の長谷寺に系統しつらある因縁
ありて我師の思ふありん。修むのつこまんとん大
師の神道より引く宿習とて一め修へといのち
よ。三ヶ目一備らる。秋秋の夢り一環ある。びる
く家服業香せらる。女三人階後の肉よりあま
く。かみらば先師の思色の牛として。遊にむ大津の
浦よりあり。野飼のたれ。たるらて。おまらり。あま
と。揚る。たれ。と。あ。たるらて。昇。冬。天。は。お
へ。通。書。書。と。書。日。の。終。日。一。面。あ。ら。る。と。る。松。野

の中は食らる。一。今。ま。で。一。た。ま。ん。と。せ。一。と。開。寺。一。
人。乃。法。花。法。師。の。信。あ。り。慈。悲。深。重。あ。り。一。修。の。牛。
と。我。師。を。一。ま。今。と。一。信。一。の。信。の。妙。典。と。一。
ひ。修。ら。る。そ。の。く。と。一。一。の。信。あ。ん。ら。ら。く。一。や。り。
猶。と。人。身。と。受。そ。の。宿。業。一。今。ま。で。一。法。花。師。
と。と。と。と。尚。一。思。牛。の。餘。業。あ。り。て。身。の。趣。く
る。一。今。ま。の。信。乃。あ。ら。る。一。あ。げ。く。る。あ。れ。び。今
ゆ。と。ま。ら。る。法。花。と。法。師。と。あ。ら。る。一。あ。ら。る。一。都。卒
の内。院。一。ま。一。急。氏。と。ね。一。一。業。院。と。ゆ。一。
と。と。と。と。門。母。勝。堂。と。あ。ら。る。一。一。一。觀。音。と。願。礼。一。苗。山
よ。ら。ら。と。一。人。の。と。く。法。花。と。法。師。一。信。備。の。切。つ。

ことん志づる心念一遊玄一都率の内院一はるごと
 凡又日の佛事乃其何したる同朋僧一若しつる也
 任別文級都中分籍事自教養寺縁起の事
 我之御明又中の法より一法法園又級都嬖捨山の意一
 一由分籍し紅人あり元恭天智六代の孫也祖文朝
 家一不忠の事ありてのまよりつらされてのち云成と
 ありてまがら一義人一てそつりける細少の時より父
 母よりつらまじ後のは孝けつら一奴親乃やこの
 たり一まづ一教と養ては費の日中流るる一めひと
 一氷と流ては冬の花とて入まじ一十日の湯と
 一毎日一午の卒都は毎つらるるまがら一十日乃湯干

午のそしむるゆりのひのごくもろくわ一へとれとく
 やうとんととら一守師もろく布徳もろくありのひら
 おまら一とまえち一とつりてけるよめり一せ日
 一濡一ける卑躬よ忽法とて一人の流うつ一よ来
 て徳をぶつり一と云人ら若養のんむらう一我はて
 むんぢがあ一とらんととてとんと云義一つらびと
 級那一とらあひひてけ僧と守師とて宿禰ととら
 ぶその後法のしは一とてと云人ら若養ととら
 ぢんと思ひ大和の御願山と云言つとてとらとらよ
 の土地とて生野の十二面觀りちあさの法一とらと
 と利とら初あつらひのよ一とら人け一てり教個人當り

一の白ひよとあしつゝ家けしめよまのりたん
 女と素とそしつゝ夢さめてほ下申けり
 長谷川里頼と云ふとて童子一人具しつゝり
 わり精翠の銀輝のしそわひつゝいあくそえけ
 い氣とつゝいしつゝりて夢想のしつゝりつゝり
 しのつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 一は滑老のちまらと成のたつゝりつゝりつゝり
 けん心探洞和しつゝりつゝりつゝりつゝり
 柔道退ふつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 船りの厨照つゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 うたけひつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり

良菴我銀美の大座とりつゝりつゝりつゝり
 親つゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 くら白命つゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 のせつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 千両の金とわつゝりつゝりつゝりつゝり
 と親つゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 伝家の念と成りつゝりつゝりつゝりつゝり
 友の命とつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 おつゝりつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり
 家の代と成ん親つゝりつゝりつゝりつゝり
 と云ふつゝりつゝりつゝりつゝりつゝり

子てつひにひいしに新向一にけりて海のほとり
 あり目なるみちと親昵せりといふことありきま
 ぎし一のちりせりたまたま世のまじり
 ぬめし我一のよとてむいしとてきし
 みよふてやせぬすもちり又具なる
 子に我をそ長るの山は神也日比るんぢは
 こと人よりうらむことひてあしく天より
 そのあむの世居のちりける箱は香葉と
 室由は備あやんで蓋と開てあれとる
 一伴の女居乃たれはあり七日と経ては肉愈と
 舞いしをさしとるげははちきのはひいし

ことごとくたがひにうらむことひてあしく天より
 威陰わくたよを賦論伏とありしひいし
 の恩あり父死去の時とありしひいし
 一人こそぞりて又可長者と名付そりおれは是
 光寺の如來の法若しとありしひいし
 石の以けりる霊地とありしひいし

首楞那そのまのる

梵曰佛弟子の中一藏慈子そまといひ
 楞那といひ母といひ多所といひ故し首楞那
 尼子といひありあれし一翻て満慈子とて
 光一よりく佛法と後持助宣とて四年の風

の三徳の徳とていひ。一教に教の月九界の天一
くやくの故一佛のほつてつらうく造七佛の中
一も後法あり今法の人の中一も色や
そ又高志法佛徳法の人中一も色又或一も人
漸くつらうのたつ具足しん空智初と造所轉善
徳とて号しん法明如來といひんと受記しん也

智の智徳の事

徳が持力者徳いふふんてんてんてんてん
とて分別の心ありその父られようく用法二千
文とりて子のため一文殊の像と畫しび大衆
智の利徳い徳く七佛そ母の空智とみごと妙觀

龍竟のううううわつた一又智徳雲のむ徳と
うらぬらぶとふらちそのみとて智像一徳とて
しそのら徳ううの造形ひらとてらて現徳とて
ら一そのひらり徳が徳の中一も色やあてのら
法奇智あり字法長年比並のぞうううううう
あつてんてんてんてんてんてんてんてん
らごうらとてあつてんてんてんてんてん
しん智徳しんてんてんてんてんてん
て梵像もて智徳も徳しんてんてんてん
ううううううのべれおま

周利槃特の事

新... 末...

